

第2章 史跡小田原城跡の概要

■ 2-1 小田原市の概要

◆ 2-1-（1）小田原市の位置

小田原市は、神奈川県西部、北緯 $35^{\circ}15'53''$ 東経 $139^{\circ}9'08''$ （世界測地系）付近に位置し、面積 113.60 km^2 を測る。令和3年(2021)1月現在の人口は188,867人、世帯数82,473を擁する。

面積は、神奈川県内の市としては、横浜市、川崎市、相模原市について4番目に広く、人口は、県内で7番目に多い。

周囲は、南から時計回りに、足柄下郡真鶴町、湯河原町、箱根町、南足柄市、足柄上郡開成町、大井町、中井町、中郡二宮町と接している(図2-1)。

地理的には、西部は箱根連山に連なる山地、中部は酒匂川流域に形成される足柄平野、東部は丹沢山地から続く丘陵地帯に大別される。

南部は太平洋(相模湾)に面し、早川漁港付近から西側は岩場の海岸線が連続し、国道135号が並走している。早川河口付近は円礫まじりの砂浜、それ以東の酒匂川河口付近を中心とした一帯は砂浜の海岸線が展開している。



図2-1 小田原市の位置（国土数値情報「全国」「神奈川県」を用いて作成）

◆ 2-1- (2) 周辺の自然環境

史跡小田原城跡を含む小田原城跡は、箱根外輪山^{がいりん}の一角を占める「塔之峰」^{とうのみね}から南に延びる丘陵の端部と、これに接し足柄平野から続く平野(低地部)にまたがって位置する。北東辺～南辺は相模湾に沿って砂浜が展開し、北辺～北東辺は山王川、南西辺～南辺は早川に画され、西辺は箱根に向けて丘陵が展開する。標高は、城域の西端、小峯御鐘ノ台^{こみね おかねのだい}西端曲輪^{せんだまがしり}付近を最高点(標高 123 m)とし、北東端部の江戸口見附^{えどぐちみつけ}付近を最低点(標高 5 m 弱)とする。

丘陵は、平野部に接する東側端部で北から谷津丘陵、八幡山丘陵、天神山丘陵に分かれ、その分起点付近に小峯御鐘ノ台大堀切西堀・中堀・東堀が位置している。この丘陵部には今でも天正 18 年(1590)の「小田原合戦」(小田原攻め)に備え北条氏が築いた防衛線、「総構」^{てんしょう}(大外郭^{だいがいかく})の空堀とその内側にある土塁が良好に残っている状況を目にすることができる。平野(低地部)は、東海道などが通過し宿場町や城下町が展開していたところであるが、市街地化が進み、低地帯にも展開していた総構の堀跡や土塁などを目にすることは、一部の地点を除き困難である。

気候は、年平均気温が 16.7℃、年間平均降雨量が 1,800 mm 前後である。黒潮が東流する相模湾のもたらす温暖な気候を利用し、丘陵ではミカン・ウメなどの果樹栽培、平野では稲作中心の農業が営まれ、明治中期以降は別荘地・リゾート地としても利用された。

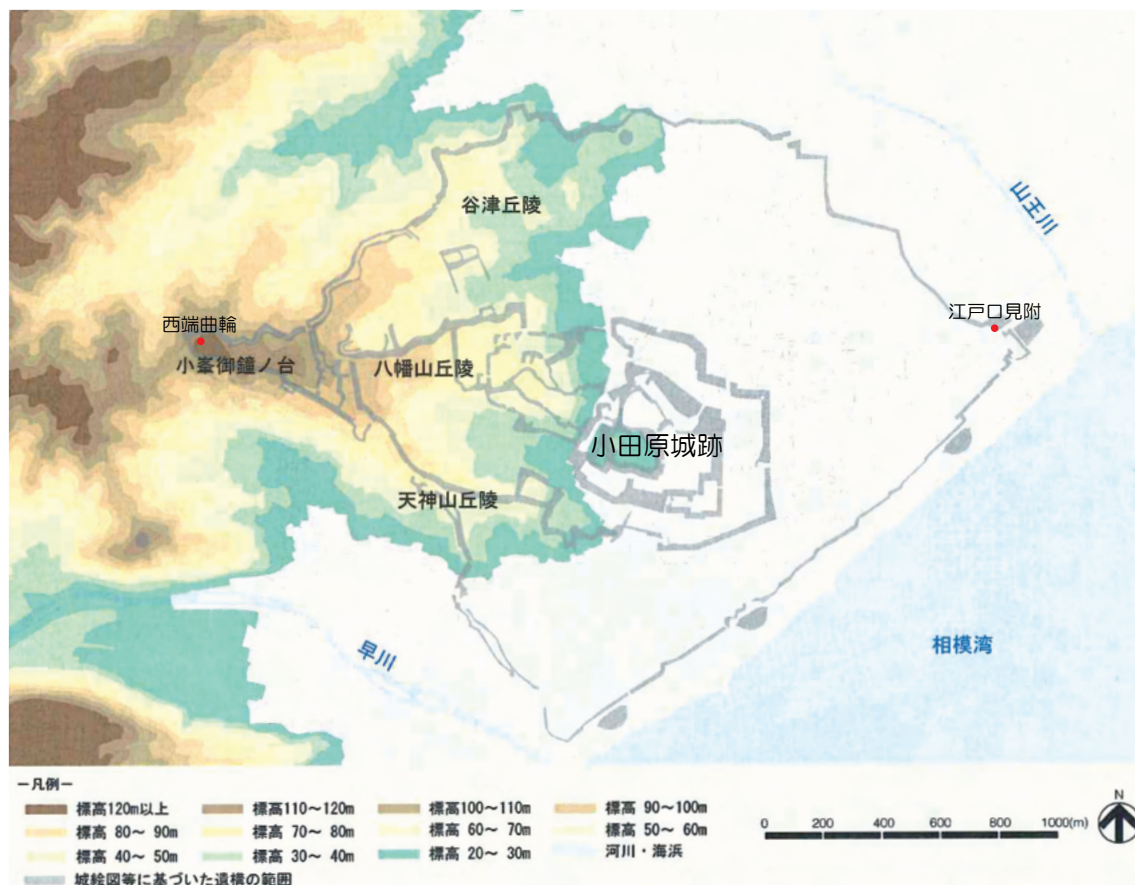


図 2-2 小田原城跡周辺の地形

◆ 2-1- (3) 歴史的環境

① 概要

小田原市には、史跡小田原城跡のほか、集落跡や古墳、城跡、石垣の石丁場跡など、旧石器時代から近世まで、280カ所の遺跡が確認されている。これらは法的には「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれるもので、「現在わかっている遺跡」である。発掘調査や工事中に発見されるなどの理由で日々その数が増え、面積や埋蔵されている遺構・遺物の年代が更新されている。

また、小田原市には、小田原城跡、石垣山、江戸城石垣石丁場跡（早川石丁場群関白沢支群）の3つの国の史跡が存在する。

ここでは、『小田原の遺跡とその取り扱い手引き』（小田原市文化財課2020）などを参考に、史跡小田原城跡の所在する小田原市の歴史を概観する。

② 旧石器時代（紀元前 33,000 年～紀元前 13,000 年頃）

旧石器時代は、平均気温が現在より5～7℃低かったと推定され、関東ローム（赤土）と呼ばれる火山の噴火による火山灰が降り積もった時代であった。紀元前 33,000 年～紀元前 13,000 年頃までとされ、土器が製作される前であるため、「先土器時代」とも呼ばれている。

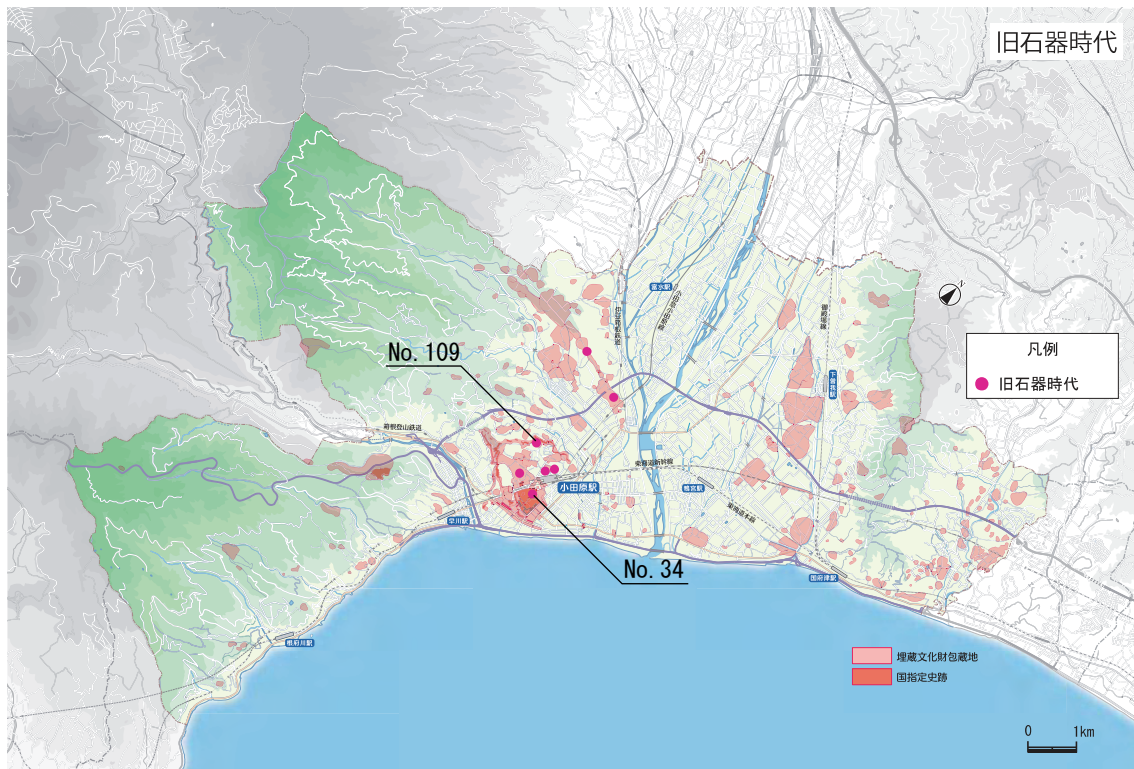


図 2-3 小田原市内の旧石器時代の遺跡

第2章 史跡小田原城跡の概要

この時代の人々は、主に、^{だせいせつき}打製石器と呼ばれる石を打ち欠いて作った石器を用いて狩猟を行い生活していた。小田原周辺では、かつてイギリスの^{はくぶつがくしゃ}博物学者 ^{ニール ゴードン}N. G. マンロー (1863～1942) が、早川や酒匂川付近の^{されきそう}砂礫層などから^{ぎせつき}偽石器(石器に似た形状の自然の石)を何点か発見し、日本初の旧石器時代の遺物として明治41年(1908)に『Prehistoric Japan』を著し、学界に発表したことが日本考古学史上有名である。

現在、小田原では、旧石器時代の遺跡が5ヵ所見つかっている。昭和57年(1982)には**小田原城跡の御用米曲輪**(No. 34 遺跡)の西側斜面より^{せっかく}石核(石器をつくる際、素材の石から石器にする石を打ち割った残りの石)が出土し、小田原での旧石器時代の人々の痕跡が明らかになった。また、^{やまのかみ}**谷津山神遺跡**(No. 109 遺跡)では、旧石器時代終末期の^{れつき}礫器15点、^{すり}磨石1点、^{いし}剥片77点^{はくへん}が出土し、市内で唯一まとまった旧石器時代の石器群が確認されている。

③ 縄文時代(紀元前13,000年～紀元前300年頃)

^{じょうもん}縄文時代は、紀元前13,000年から紀元前300年頃までの約1万3千年間続き、土器が登場した時代である。この時代の土器の表面には、縄を転がして付けた「縄文」が施されたものが多いため「縄文土器」と呼ばれ、それを使用した時代なので「縄文時代」と呼ばれている。考古学では土器の変遷から、縄文時代を^{そうそうき}草創期(紀元前13,000～紀元前9,000年頃)、^{そうき}早期(紀元前9,000～紀元前5,000年頃)、^{ぜんき}前期(紀元前5,000～紀元前3,000年頃)、^{ちゅうき}中期(紀元前3,000～紀元前2,000年頃)、^{こうき}後期(紀元前2,000～紀元前1,000年頃)、^{ばんき}晩期(紀元前1,000～紀元前300年頃)の6期に区分している。

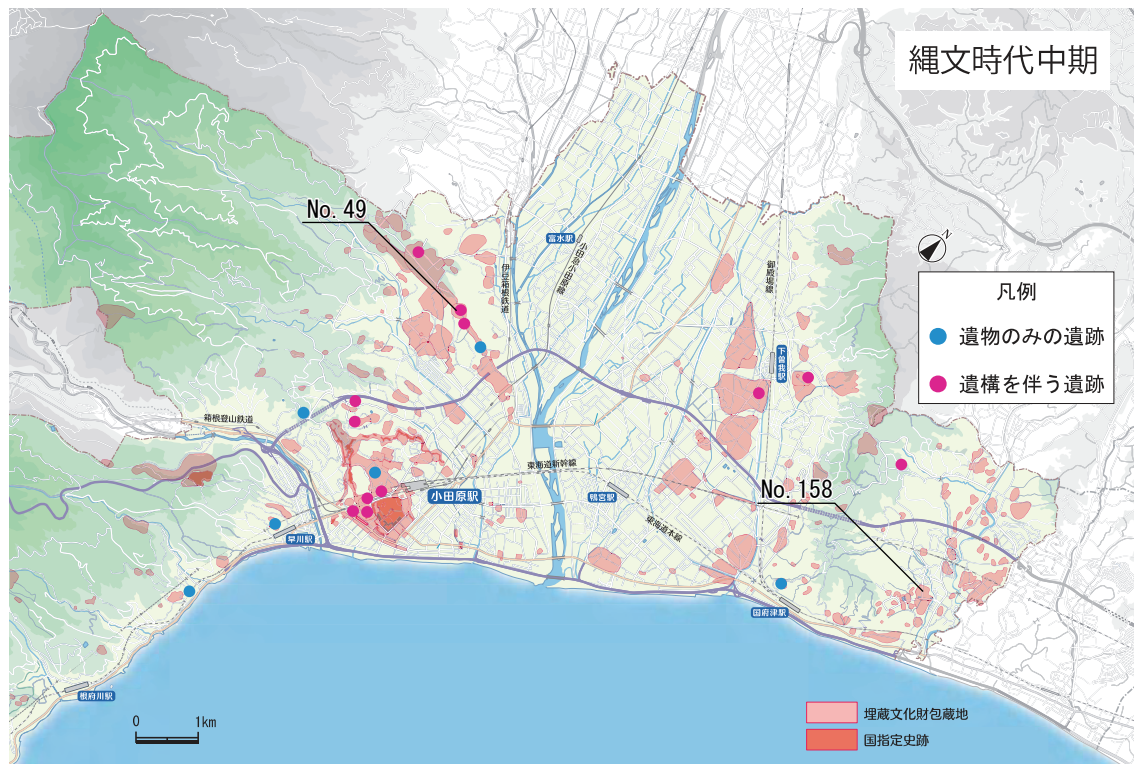


図2-4 小田原市内の縄文時代中期の遺跡

また、縄文時代の人々は、特に中期以後、主に台地上に^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居をつくり集落(ムラ)を形成して定住的な生活を送るようになった。縄文土器はこの定住生活によって発達し、また^{どぐう}土偶を用いた^{さいし}祭祀が行われるなど、高度な精神性や文化を持つ社会が発展していった。

小田原市内には、109カ所の縄文時代の遺跡が見つまっているが、特に久野^{く の}、荻窪^{おぎくぼ}、水之尾^{みずの}、早川^お、根府川^{ねぶかわ}などの箱根外輪山^{がいりんざん}から延びる丘陵上に集中している。中には、発掘調査によって70軒ほどの堅穴住居跡が確認された、**久野一本松遺跡**(No. 49 遺跡)などがある。

また、縄文時代早期～前期に起こった「縄文海進」(^{かいしん}紀元前5,000～4,000年頃がピークとされる。)では、平均海面が現在に比べ3m前後上昇し、海水や海水の混じった水(^{きすい}汽水)が内陸部に浸入し、現在の^{ていしちたい}低湿地帯を覆っていたといわれている。そのため、現在は内陸になっている場所でも貝塚がみられ、小田原では市の東部で「古中村湾」に沿って位置する縄文時代前期、紀元前4,000年頃の^{はねお}**羽根尾貝塚**(No. 158 遺跡)が確認されている。羽根尾貝塚では縄文土器のほか、骨角製の髪飾り・釣針、漆製品、木製の櫓・弓、獣骨・魚骨などが出土している。

④ 弥生時代(紀元前300年～紀元後300年頃)

弥生時代は、紀元前300年頃～紀元後300年頃までとされ、大陸から^{ちょうせんはんとう}朝鮮半島経由で伝来した、より発達した文化の影響が及び、稲作など農耕が開始された時代でもある。この文化のなかで使われた弥生土器は、前代の縄文土器にくらべるとシンプルなデザインで、明治17年(1884)に^{ありさかしやうぞう}有坂鋁蔵らによって最初に発見された、当時の東京の本郷区向ヶ丘弥生町(現在の文京区本郷2丁目とされる)にちなみ命名された。また器形のバリエーションが少ない縄文土器に比べ、弥生土器は、煮炊き用の甕、貯蔵用の壺、祭祀用具とされる高坏など、用途によって器形が異なっていた。また、稲作農耕とともに、^{せいどうき}青銅器・^{てつき}鉄器などの^{きんぞくき}金属器の使用が開始されたことなども弥生時代の特徴である。

弥生時代には、農耕を基盤とする集落が形成され、大きな集落には堅穴住居の外側に^{かんごう}環壕と呼ばれる壕を巡らせたものや、堅穴住居とともに倉庫と考えられる高床式の掘立柱建物跡が発見されることもある。小田原市に隣接する大井町の中屋敷遺跡のように、弥生時代前期の遺跡もあるが、小田原を含めた南関東地域に本格的な弥生文化が波及したのは弥生時代中期以後のことで、それまでは縄文時代に近い暮らしが続いていたと推測される。

現在、小田原市内には、弥生時代の遺跡が74カ所発見されている。小田原周辺は、弥生文化が南関東地方に波及した際の玄関口の役割を果たした地域のひとつで、^{なかざと}**中里遺跡**(No. 14 遺跡)が特に有名である。中里遺跡は、本格的な弥生時代の集落としては関東地方最古級のもので、瀬戸内海東部地方の土器が一定量出土したことから、西日本の弥生文化との交流があったものと考えられる。また、炭化米が出土し、^{けいはん}畦畔が検出されていることから水田の存在が想定される。さらに、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓と呼ばれる、人を埋葬した主体部(掘り込み)を取り囲む方形の溝を巡らした形状の墓が、集落の近くなどにつくられている。

第2章 史跡小田原城跡の概要

このほか小田原市内では、扇町一丁目の^{おうぎちょう}谷津(小田原)遺跡(No. 200 遺跡)なども、弥生時代の遺跡として全国的に知られ、^{ちよみはら}千代南原遺跡(No. 75 遺跡)は、小田原で初めて方形周溝墓が発見された遺跡である。

このほか、^{やまがみした}久野山神下遺跡、^{たござかい}久野多古境遺跡(ともにNo. 98 遺跡)などで方形周溝墓、^{せきのうえ}羽根尾堰ノ上遺跡(No. 159 遺跡)などで竪穴住居跡などが確認されている。

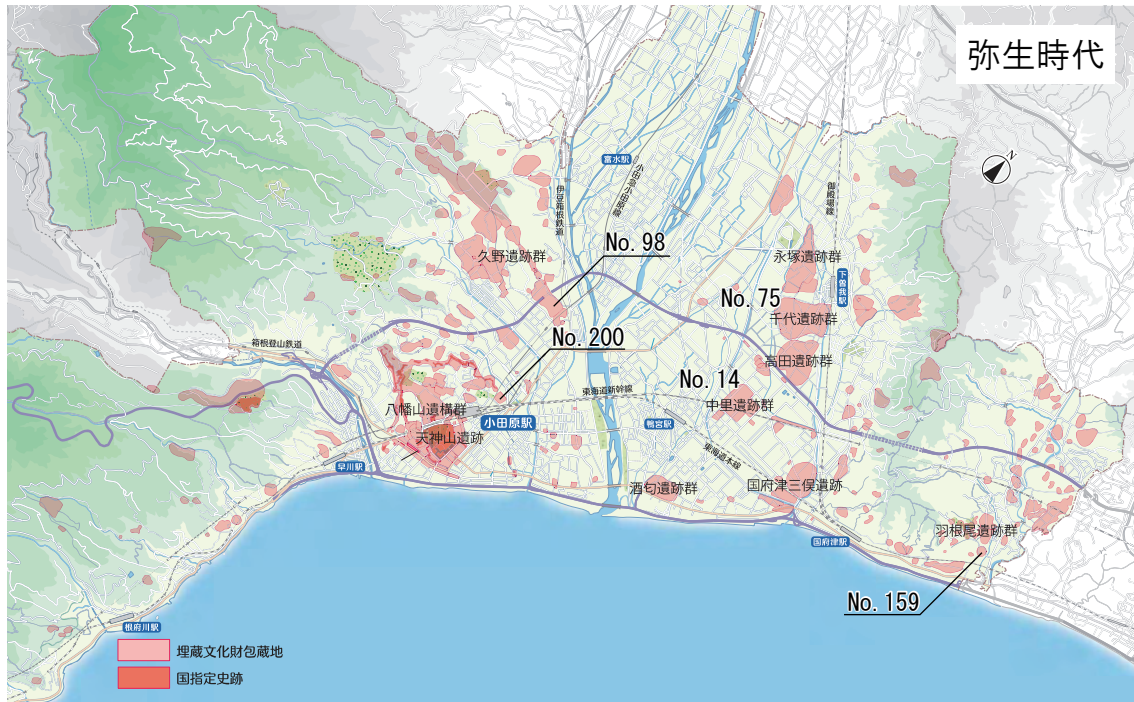


図 2-5 小田原市内の弥生時代の遺跡

⑤ 古墳時代(3世紀中頃～7世紀末)

古墳時代は、大きく土を盛り上げた墳丘を持つ墓が作られた時代である。古墳は3世紀中頃に西日本で発生したもので、定形化した墳丘と副葬品を持ち、次第に日本各地に広まっていった。古墳には円墳・方墳・前方後円墳などがあり、主に豪族と呼ばれる有力者たちを葬った墓とされている。古墳が各地に伝わっていったことは、畿内王権が勢力を全国に広めていく上で、各地の豪族に地域の支配権を認めた象徴と考えられている。考古学では、3世紀中頃～4世紀を古墳時代前期、5世紀を中期、6世紀以後を後期としている。

小田原では、古墳時代前期の古墳と考えられるものに^{ちよみはら}千代南原遺跡(No. 75 遺跡)で検出された古墳の周溝や、^{ひがしちよう}千代東町遺跡(No. 75 遺跡)で見つかった全長 70 m 級の墳丘などがある。

6世紀、古墳時代後期になると石室の形態が竪穴式から横穴式に変わり、一つの石室に何人も埋葬できる追葬が可能となるとともに、小さな円墳が密集してつくられる群集墳が出現した。

小田原では、^{こふんぐん}久野古墳群などがこれにあたり、現在 39 基の円墳が確認されている。このうち、最大の規模をもつ^{ひがしちよう}久野1号墳(No. 97 遺跡)は、墳丘の直径約 40 m を測る神奈川県

内有数の規模を持つ円墳である。**久野2号墳**(No. 49 遺跡)、**久野総世寺裏古墳**(No. 73 遺跡)などで発掘調査が行われ、直刀、鉄鏃などの武具、勾玉、管玉、金銅製耳環などの装身具や須恵器などが出土している。なお、久野古墳群などの墳丘を有する古墳は、小田原西部の久野丘陵に集中している。

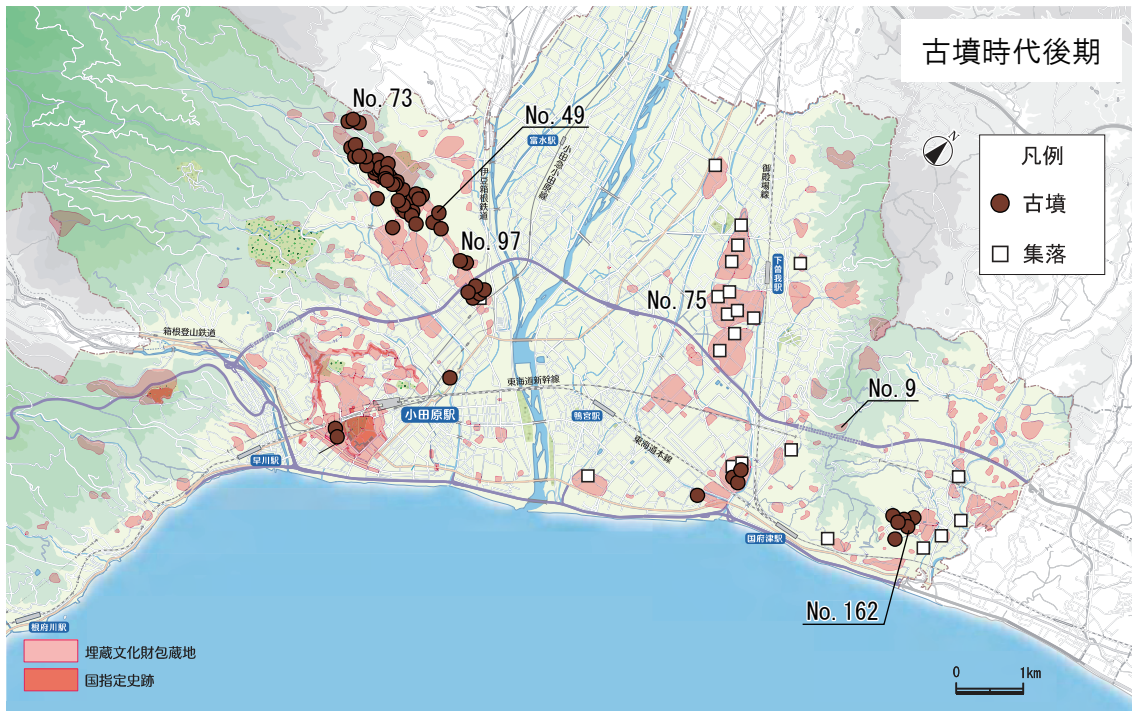


図 2-6 小田原市内の古墳時代後期の遺跡

また、この時代には墳丘を持たず、丘陵の斜面を掘り込んで築いた形式の墳墓である横穴墓群が**田島**(No. 9 遺跡)、**羽根尾**(No. 162 遺跡)など小田原東部の大磯丘陵に多数分布している。

古墳時代の生活は、基本的に弥生時代と同じような場所に集落が営まれていた。竪穴住居は、6 世紀に入るとカマドが設置される構造となった。また、土器は主に土師器と呼ばれる弥生土器の伝統を引く赤褐色の素焼きのものが占めるが、古墳時代中期の 5 世紀からは、朝鮮半島から伝えられた窯で焼成された須恵器が加わった。

小田原における古墳時代の集落は、小田原高校近くの八幡山丘陵、千代・高田・永塚の一带や羽根尾などで確認され、とくに千代・高田・永塚の一带は、発掘調査で多くの竪穴住居跡が発見され、多くの人々が生活していたと推測されている。

⑥ 奈良・平安時代（8 世紀初頭～12 世紀後半）

奈良・平安時代は、畿内の中央政府による律令制度に基づく政治が行われた時代で、地方の役所である国府や郡家が設置された。都と地方の役所とを結ぶ街道には駅が置かれ、国家鎮護のため国ごとに国分寺と国分尼寺が建立され、地方へも仏教文化が広がった。

この時代の小田原は、相模国足下郡などに属し、千代の**千代寺院跡**(通称: **千代魔寺**) (No.

第2章 史跡小田原城跡の概要

75 遺跡)と^{しもそが}**下曾我遺跡**(No. 222 遺跡)などがある。

千代寺院跡は、発掘調査によって奈良時代には寺院の建物があつたことがわかり、鬼瓦(瓦屋根の棟の端に据えられる鬼などを表した^{そうしよくがわら}装飾瓦)は、武蔵国分寺跡から出土した鬼瓦と同じ型で製作されたものと判明した。また、千代寺院跡の周辺からは木簡(墨書のある木片)も出土している。なお、千代寺院跡が相模国分寺跡と考えられていた時期もあつたが、近年の調査・研究の結果、足下郡の有力豪族が造営した寺と考えられるようになった。

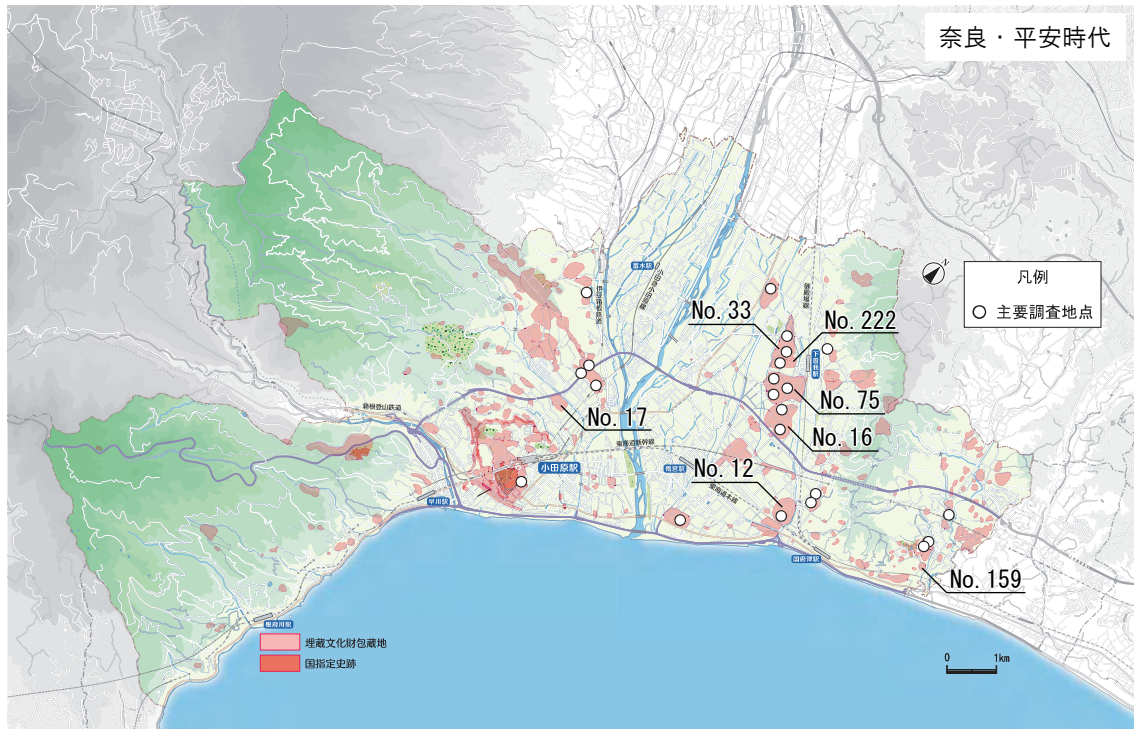


図 2-7 小田原市内の奈良・平安時代の遺跡

下曾我遺跡は、平安時代の木組み井戸のほか、木簡、墨書土器、釉薬(うわぐすり)をかけた緑釉・灰釉陶器などが出土し、^{さが ばた}**永塚下り畑遺跡**(No. 33 遺跡)では土器や瓦などを敷いた道路状遺構などが検出された。また、^{きたばたけ}**永塚北畑遺跡**(No. 33 遺跡)では、「^{みの}美濃」の刻印を持つ須恵器が、関東地方で初めて出土した。これら永塚周辺の遺跡は、郡家などに関連する遺跡と推測されている。

一方、人々の暮らしは、古墳時代と同様、竪穴住居などからなる集落を形成している。この時代の集落跡は、**羽根尾堰ノ上**(No. 159 遺跡)や**千代**(No. 75 遺跡)・**高田**(No. 16 遺跡)・**永塚**(No. 33 遺跡)・^{こうづ みつまた}**国府津三ツ俣**(No. 12 遺跡)・**久野**(No. 17 遺跡)など、市内各所で発見されている。

⑦ 中・近世(12世紀後半～1868年)

一般に中世は源頼朝が鎌倉幕府を開いた鎌倉時代から、近世は徳川家康が江戸幕府を開いた江戸時代からとされているが、小田原では豊臣秀吉の天下統一が事実上達成された天正18年(1590)の「小田原合戦」をもって中世と近世の画期としている。

鎌倉時代の小田原は、京都と鎌倉をつなぐ交通の要衝で、鎌倉幕府に仕える御家人の領地が点在していた。この時期の遺跡は、久野多古境遺跡(No. 98 遺跡)や下堀宮ノ脇遺跡(No. 271 遺跡)、御組長屋遺跡(No. 101 遺跡)などがある。久野多古境遺跡や下堀宮ノ脇遺跡では、常滑焼(愛知県)の三筋壺が出土し、死者の火葬骨を納めた蔵骨器や経筒として用いられたと考えられている。また、御組長屋遺跡では14世紀代の遺物が多く出土した井戸が見つかり、当時の人々の生活の一端をうかがうことができる。

室町時代になると、中期の応永23年(1416)に、鎌倉府における政争「上杉禅秀の乱」鎮圧の功により、駿河御厨の豪族大森氏が足柄に所領を得て進出し、「享徳の乱」で鎌倉府が崩壊した2年後の康正2年(1456)に小田原城を創築したと伝えられている。しかしその位置、遺構については必ずしも明らかではない。明応5年(1496)から文亀元年(1501)の間に伊豆韮山の伊勢宗瑞(北条早雲)が大森氏を追って小田原に入城して以後、2代氏綱が居城とするなど、北条五代の間に小田原城は拡大・発展し、東海道交通の要衝としての性格も加わって、小田原は関東地方のみならず全国にその名が知れわたるようになった。最終的には天正18年の「小田原合戦」に備え、当時の城下町や山地を土塁や空堀で囲むという中世的・東国的な手法を用いて形成された「総構」が完成し、戦国時代最大と言われる規模にまで拡大した。

発掘調査によって確認された小田原城の姿は、16世紀以後の北条氏の時代以後の姿で、15世紀頃の大森氏時代の様子は今のところ確認されていない。北条氏時代の代表的な遺構には、「障子堀」と呼ばれる堀がある。

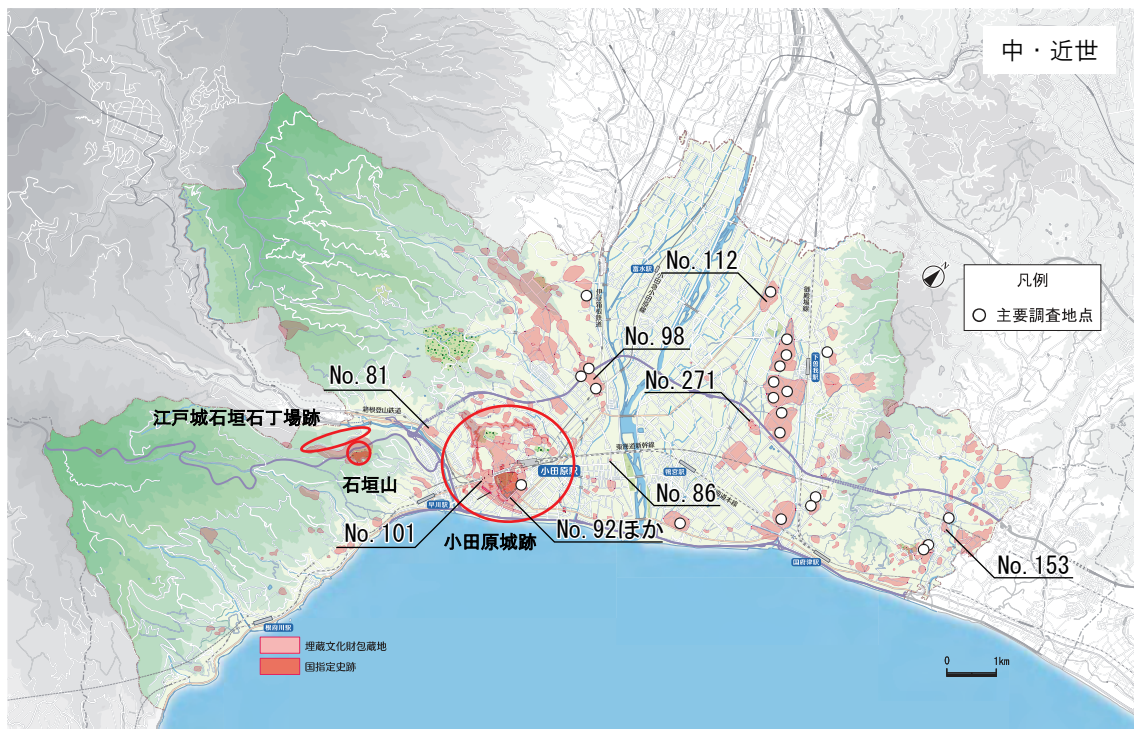


図 2-8 小田原市内の中・近世の遺跡

第2章 史跡小田原城跡の概要

「小田原攻め」の結果、初代早雲から五代氏直に至るまでの約1世紀の間、関東に武威を奮った北条氏が、**石垣山**(史跡石垣山)に石垣の城を築いて攻め寄せた豊臣秀吉によって滅ぼされると、関東の首府は徳川氏によって小田原から江戸へ移され、やがて江戸時代を迎えた。

こうした時代の移り変わりとともに、小田原城も中世の城から石垣を構築した近世の城へと変化・変容した。江戸時代の小田原は、箱根を控えた江戸城の西の守りとして重要視され、城下町の近世化も進められた。諸大名の参勤交代や庶民の往来が盛んになると、東海道屈指の宿場町として江戸時代末期まで繁栄し、天保年間(1830～1844年)には本陣4軒、脇本陣4軒、旅籠95軒が存在していた。

なお、これら以外の遺跡については、小田原城以外の城館遺跡として、鎌倉時代から江戸時代にかけての館跡と考えられる**小船森遺跡**(No. 153 遺跡)、**西大友川窪遺跡**(No. 112 遺跡)「小田原攻め」の際の家康の陣地である**今井陣場跡**(No. 86 遺跡)、合戦前には小田原城の総構に続く陣地だったと考えられる**富士山陣場跡**(No. 81 遺跡)、江戸時代に江戸城の石垣を調達した石切り場である**江戸城石垣石丁場跡**(史跡江戸城石垣石丁場跡早川石丁場群関白沢支群)や**小田原城下三の丸の遺跡群**(No. 92 遺跡ほか)などがある。

表 2-1 小田原市内の遺跡

時代	暦年代	遺跡数	遺跡名
旧石器時代	BC3, 0000 ～ BC13, 000	5	史跡小田原城跡（御用米曲輪）、谷津山神遺跡など
縄文時代	BC13, 000 ～ BC300	109	羽根尾貝塚、久野一本松遺跡など
弥生時代	BC300 ～ AD300	74	中里遺跡、谷津遺跡、久野多古境遺跡、羽根尾堰ノ上遺跡など
古墳時代	AD300 ～ 7C 末	107	千代南原遺跡、千代東町遺跡、久野古墳群
奈良時代	8C 初～ 8C 末	90	千代寺院跡など
平安時代	8C 末～ 12C 後半	88	曾我遺跡、永塚下り畑遺跡、永塚北畑遺跡など
中世	12C 後半～ AD1, 590	92	史跡小田原城跡、史跡石垣山など
近世	AD1, 590 ～ AD1, 868	68	史跡小田原城跡、史跡江戸城石垣石丁場跡など
時代不明		11	

* 1つの周知の埋蔵文化財包蔵地に複数の年代の遺跡があるため、周知の埋蔵文化財包蔵地数と遺跡数は異なる結果になる。小田原市の周知の埋蔵文化財包蔵地：280ヵ所（令和3年〔2021〕3月現在）

⑧ 近・現代（1868年～現在）

近代以後の小田原は、明治新政府のもと明治2年(1869)の版籍奉還で小田原藩(藩知事大久保忠良)となり、明治4年(1871)7月に廃藩置県で小田原県が成立し、藩主大久保家の支配を離れた。同年11月に小田原県は伊豆韮山代官所に県庁を置く韮山県と併わせ足柄県となり、県庁は小田原城内に置かれた。その後、足柄県は明治9年(1876)4月に、旧伊豆国が静岡県に、旧相模国が神奈川県に編入され、同年6月に小田原は神奈川県21大区1小区となった(小田原市HP「ミニガイド(歴史)」)。

明治22年(1889)4月に市制・町村制が施行され、現在の小田原市域には、小田原町、大窪

村などの1町21村が成立した。また、小田原町にあった旧5町、すなわち新玉町^{あらたまちよう}、万年町^{まんねんちよう}、緑町^{みどりちよう}、幸町^{さいわいちよう}、十字町^{じゅうじちよう}は、小田原町新玉・万年・緑・幸・十字となった。昭和13年(1938)に史跡指定された際には、小田原城跡は神奈川県足柄下郡小田原町と足柄村を跨いで位置していたが、昭和15年(1940)年12月20日に町村合併によって小田原市に位置することとなった。

なお、戦後は、昭和23年^{しもふなか}の下府中村との合併を皮切りに、昭和46年4月^{たちばなまち}の橘町との合併を経て、現在の小田原市域が成立している。